

輝かそう生命の富を

(御書全集 二二三頁二行目と同四行目)
編年体御書四五二頁九行目と同十二行目

当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華經にたてまつり名をば後代に留べし、
大海の主となれば諸の河神・皆したかう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや、法華經の
六難九易を弁うれば一切經よまざるにしたかうべし

「日本国に第一に富める者は日蓮なるべし」

私はこの言葉が、配流の地・佐渡において述べられたことに、深い感動を覚えるのであります。寒
さと飢え、そして虎視眈々と命をねらう念仏者の群れのなかにあつた孤独の世界。凡夫の目からみれ
ば、まさに地獄そのものと映るでありましょう。しかし、大聖人の生命には日本一、世界一、いな宇

宙一の「富」が輝いていたのであります。

これは、強気や独善の言葉ではない。心奥より自身の立場を喜ばれている崇高なる御境界の一言であられる。苦難の極底にあって、このような偉大な輝きを示した人が他にあったであらうか。天平期より江戸期にいたるまで、流罪の地・佐渡に身を送られた人は、数しれずありました。しかしそのなかにあって、かくも崇高な御境界に比すべき、真実の歓喜の声を発した人が、あったであらうか。みな、憂愁と悲嘆と絶望の日々を送るばかりでありました。

この一事をもって、日蓮大聖人の御内証の深さを思うべきであります。仏法上、なにが最高の財宝か——それは心の財、すなわち生命の内より発する豊かさこそ、第一の宝であります。その心の財を根本として生きぬいていく信心の極致を、大聖人のお姿から学ぶべきであります。

ある世界的に有名な歌手の死が最近報ぜられました。「有名」の二字を極め、いかに人々の渴仰の的となって一時の華美の世界をつくりあげようと、生命の奥底だけはどうしようもなかった。彼自身、まさしく孤独地獄そのものであったとみざるをえないのであります。

また私は、この御文をとおして、戸田先生の懐かしい思い出がよみがえってまいります。先生が公会堂で御書の講義をされたさい「あなた方が功德を得たといっても、私からみれば、まだまだ小さい。小指の先のようなものです。私の得た功德は、この公会堂いっぱいほども大きいのです」と何度いわれておりました。

結局、生命の豊かさ、深さ、大きさ、それが人間としての真実の財宝なのであります。われわれが

御本尊を持った以上、わが功德、福運は、世界一偉大であるとの確信に立って進んでいきたい。いかなる苦境、苦難に遭遇しても、その胸中の太陽の輝きさえあれば、かならずや人生を未来へと開いていけることはまちがいないと確信するのであります。

「命は法華經にたてまつり名をば後代に留べし」

人間だれしも、かならずなんらかのものに、日々命を使っているものであります。ある人は家庭や子供に、ある人は会社に、またある人は趣味に等々。一人の人間であっても、時々刻々、さまざまな対象に命を費やしております。その意味では人生とは、日々、命を使っていく過程の総体でもあります。

しかし、その命を帰していることが、ほんとうにその人の大満足の人生となるかならないか、すなわち、人生の総決算において、大きな悔いが残るか、あるいは真実の生きがいを感じるかという、重大なテーマが残っております。多くの人は、命を使うべき対象が、有為転変の無常の世界であることに気づいていない。ゆえに、その人生にもまた、不安と動揺と、陰鬱の深淵が広がっているのです。

それに対し、根本の常住の世界に棹さして生きる人の命には、満足と不動の強さがあり、そこから発するいっさいの振る舞いは、作々発々のはつらつたる姿を現じていくのであります。まことに法華經に命をたてまつるほど、強靱な人生はないのであります。

「名をば後代に留べし」とは、法華經ゆえの、真実の人間としての名を、永遠にとどめるということ

であります。

たとえば、大聖人御在世中の四条金吾の名は、歴史書のなかにも一行、一言も載っていない。しかし、七百年後の今では、日本中、世界の人々の口にさえ、広布の誉れとして響き渡っております。大聖人より「法華宗の四条金吾・四条金吾と鎌倉中の上下万人乃至日本国の一切衆生の口にうたはれ給へ」(御書全集一一一八頁)といわれた御金言どおりの名を、後代にとどめたのでありました。

私はいつも確信している。それは広宣流布のために、わが人生をかけて実践する人は、三世十方の諸仏の知るところであり、その名を宇宙に輝かせているのであります。ゆえに、その名は後代に、まことの人生の勝利者としてとどめられるのであります。

さらに、この「名をば後代に留」とは、その人の永遠の福運を意味しております。三世諸仏に、その名が称賛しょうさんされるということは、即、生命自体に揺るぎなき大福運の軌道をつくることを意味している。ゆえに、その福運の名の記刻きくは生々世々に続いていくことを、確信されたいのであります。

実践こそ仏法の生命

「大海の主となれば諸もろもろの河神かじん・皆したがう須弥山の王に諸さんじんの山神したがはざるべしや、法華經の六難九易わきまを弁わきまうれば一切経よまざるにしたがうべし」

「六難九易」は、法華經見宝塔品第十一に説かれています。法華經を仏滅後に受持することが、いか

に至難であるかを明かしたものです。

この宝塔品には三箇の鳳詔ほうしやうといって、滅後の弘法を三度にわたり勧め命じている。その第三の諫勅かんちよくのなかに、この六難九易の原理が説かれていることは、仏滅後末法の妙法広布に生きる勇者に、なみなみならぬ決意を要請するためであります。

須弥山を接つって他方の無数の仏土に擲なげ置いたり、乾いた草を背負って劫火のなかに入っているも焼けないことなど、およそ普通では不可能、あるいは不可能に近い難事の例を、九つあげている。そして、これを法華經実践の六例に比べれば、なお易やさしいことだと經典が述べていることは、すでにご承知のことと思います。

法華經流布には大難があることを示した、この「六難九易」を引かれて、大聖人は、もしもこの六難九易を実践する人がいるとすれば、その人こそ仏法の王者である、たとえ一切經を読み実践しなくても、それら經教の原理が一つの例外もなく、この法華經の行者のものになるとおおせであります。

これは、大聖人こそがいつさいの仏の根源の御本仏であるがゆえに、いつさいの仏菩薩が随従ずいじゆうし、いつさいの功德が雲集しているとの御断言なのであります。大聖人こそ宇宙第一の本源の仏であられることが、ここにも明確であります。

「法華經の六難九易くいを弁わきまうれば一切經よまざるにしたがうべし」——この一節は「実践」ということの偉大さと、難をうけることの重大さをお示しです。

実践は、いうまでもなく宗教の生命であります。あらゆる宗教をはじめ、いつさいの思想、哲学の

究極の使命は、一人の人間を救うかどうか、事実として何人の人々を救ったかどうかにある。どれほど高邁こうまいな説を掲げようとも、博学を誇ろうとも、六難九易という現実のなかで実践しぬく事実は、はるかに及ばないし、その実践があつて初めて、成仏への大道が開けるのであります。

“一人”に光あてる妙法

ともかく宝塔品のなかにおいて、六難九易の原理が示されていることは、一個の人間の生命の扉とびらを開き、そこに抜本的蘇生そせいの光源を送りゆくことが、いかに困難であり、いかに偉大な法理であるかを説かれたものといえる。九易とは物理的困難を象徴したものと拝せる。また六難とは、生命の世界に分け入っていくことの戦いの至難さを述べられたものであり、胸中を制覇せいぱしゆくことが、いかに困難であるかを示した原理なのであります。

ゆえに、日蓮大聖人は、この六難九易を引かれながら「今度・強盛の菩提心を・をこして退転せじと願しぬ」（御書全集二〇〇頁）とも述べられていることを、深く銘記していただきたいのであります。この六難九易の原理を、たんなる譬たとえ話や主観的な心情、決意といった次元で受け取っていてはならない。真実の仏法運動であるならば、かならずそうした困難をとまなうという客観的事実を、未来永久の戒めとしておおせなのであります。

私は以前、六難九易の原理的客観関係についてふれたことがあります。が、われわれの運動は一人の

人間を徹底して大切にし、悩める一人、嘆きの一人、をどう救っていかかが眼目であります。こうした人間観は、すべての人々を数のなかへ組み込み、権力による支配、統制下におこうとする人間観とは逆であり、方向を異にするのであります。ゆえに、権力というものは、そうした運動には、つねに過敏なまでの警戒心を働かせており、そこに、相対抗する緊張関係が生ずることは、必然であります。原理的客観関係とは、そのことをいうのであります。

さて過去の宗教の歴史をふり返ってみてもわかるとおり、そのほとんどの宗教というものは、支配階層に直結し、あるいは権力のなかに組み込まれ、その下僕^いの存在となるような忌まわしい道をたどってきた。しかし今、ここに説かれる宝塔品においては、一人の人間の無限の可能性をいかに引き出し、輝かせていくかの原理を明かしている。この一個の人間の内面世界を徹底して照射し、そこに自在の生命的境涯を会得せしめていこうとする方途からしても、仏法がいかに革命的な原理であるかわかりでありましょう。宝塔品のなかで六難九易が取り上げられた真の意味も、この一点にあるわけであります。

かつて、オーストリアに初めて鉄道が敷かれたさい、人々の反応はつぎのようであったそうです。

「……ウィーンの新聞は恐怖と不吉な予言でわきたった。鉄道王ロスチャイルドは十八世紀的に平和な国に二十世紀の悪魔をおしつけたと非難された。人間の呼吸組織は一時間十五呎以上の速度にたえられないから、肺は虚脱状態になり、循環器はこわれる。旅行者の鼻、目、口、耳から血が迸り^{はなは}でるにちがいない。六十呎以上の長さのトンネルは、客車のすべての乗客を窒息させ、汽車は他の出口か

ら運転者のいない靈柩車れいきゆうとなつてでてくるだろう」と。

今からみれば笑ひ話のようなことが、本気で論議されていた。このように、一般世間の目というのは、未知のものに対して、本能的な不安感をもっているのです。また、権力の習性は、こうした一般の心情、心理を巧妙に利用しつつ、支配の網を広げてくるのが常であります。ゆえに、民衆の賢明さを開発することが仏法運動の成否を決するといつてよい。

ともあれ、われわれの未聞の運動が、對抗する力の存在なしに進むわけがありません。釈に「惑耳わくに驚心」と説かれているとおりであります。だからこそ、世間の常識や良識を内から輝かせていく労作業が必要とされるわけですが、それと同時に、私たちの仏法運動にはかならず難があることを、永遠に心にとどめていきたい。

皆さんは、内には、この六難九易の原理を確信し、いかなる諸縁にも幻惑されることなく、ものごとの奥底を見極めつつ、外にあっては春風のごとく、地域の柱の存在として活躍されますようお願いいたします。